笑顔で人々を幸せにしていくプロジェクト、「Merry Project」が札幌でも開催される。笑顔の写真が街中に溢れる「Merry Project」はその街のできるだけパブリックな場所で展示を行うことにより、コミュニケーションアートを通して、世界に「Merry（幸せ）」を広げようというもの。今まで開催された地域はニューヨーク、神戸、ロンドン、東京などテロや火災、不況などといったダメージを受けた都市。その地に住む道行く人より笑顔とメッセージをもらいそれが大きなポスターとなり街を賑わせ、開催された街は「Merry」な空気で溢れ返った。各都市で成功を収めた中、2003年夏開催された東京では展示だけにとどまらず自分たちの足元を見直そうということから希望者による「ゴミ拾いプロジェクト」もスタート。北海道全道でもごみ袋付のフリーペーパーを配布し、5万人規模の「ゴミ拾いプロジェクト」を行う予定だ。この度5月より開催される「Merry in Sapporo」について、「Merry Project」の生みの親である東京在住のアートディレクターの水谷孝次氏にインタビューおよび札幌の主要スタッフの4人にコメントをいただいた。

MAGNET: 今回は「アートと社会」というテーマで取材をさせていただいています。「メリープロジェクト」はその活動が「コミニュケーションアート」という説明が本テーマに通じるものを感じました。札幌の印象、「メリープロジェクト」について、そして「アート」のありかたまでお話を聞かせていただけますか。

水谷孝次: 札幌には、新しいことをする息吹やフロンティア・スピリッツみたいなものを感じます。まだ数回しか来たことはないですが、いろいろ新しいことをやろう！という動きがあるのを感じたり、教えていただいたりしています。でも、まだまだそれらは表面的だったり、おもちゃっぽかったりする印象があります。特に若者がなにかやろうとするときは変に形にとらわれず下手でもいいから、モノマネではない、若者だからできる斬新さがあればいいな、と思うのです。そして、なにかをやるならまずそれは社会性があるのか、簡単にいえば社会にどう役立つのか、というのが一番肝心なことだと考えて欲しいですね。僕達がやっていることは、経験値は高いけど、逆にそのうえでまとめているふ点で弱みもあると思うんです。若者たちには、僕達にはできない表現を期待したいですね。完成度が低くても良いです。重要なのは「新鮮なアイディア」です。そしてそれは社会に役立つものでなって欲しいです。

「Merry」という言葉と「さっぽろ」という組み合わせは響きがいい、撮影していてもふさわしい街じゃないかな、と思うのです。歴史が浅い街であるがゆえに、新しいものに関心が高い。札幌にはニューヨークと同様な「歴史のない素晴らしさ」というのがあるんじゃないかな。僕は「Merry」をいろいろな場所でやっていますが、行う地域というのも考えていて、札幌はいいな、と思ったんです。伝統を重んじる地方だと場所によっては、「Merry」をやっても人も集まらなかったり、「Merry」を地元でやろう！という人もいないと思うんです。伝統が強い場所だと、過去の歴史の中でものを判断すると、伝統的なものだけを評価をすることが多いと思いますから。これがニューヨークだと、道に落ちているものをアートといってしまったり、それが現実に売買されることもあるわけですよね。新しいものに対する、興味・関心が強くて、新しいものを認めていこう、ということを住んでいる人達自身が「自負」をしている訳ですよ。

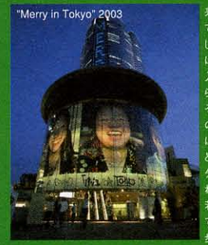
"Merry-London Life" 2001

「Merry」には「街を元気にしたい」という目的があります。「街に明るさを取り戻したい。負の遺産の街をエンターテイメントな輝きを取り戻す」それが、コンセプトなのかな、と思っています。「9・11」後のニューヨークで行なったときも、そのコンセプトの意味をすごくわかってくれて、「このような活動はアメリカでもやってないのに日本から来てやるというのは素晴らしい」という反応がありました。新しいものを応援してくれましたね。人種のるつぼのマンハッタンにいる人って、みんななにか考えて来ている人だと思うし、「Merry」の写真に寄せられたメッセージの意味は深かったですね。震災後の神戸でも2回やっていますけど、みんな震災によってなくしたの被害にあっていて、顔に傷のある人もいるんだけど、みんな元気なんです。マイナスがあってプラスがある。光と影があるんです。強い光があれば、それだけ強い影もある。影があるなと感じられる人はどピュアな美しい笑顔を見せるところに人間のポジティブな復元力を感じました。

笑顔で参加することによって震災を乗り越えたパワーを僕たちに見せてくれたんです。それはお世話になった人のお礼の意味もあったかもしれませんね。「Merry」については、笑顔がポスターになる、というのが新鮮でどこでも、喜んでもらえました。

"Merry in Tokyo" 2003

東京という街は五目寿司みたいなもんで、いろんな人が集まってきて、一日に凄い量の情報が飛び交う。だから、ここでじっくりなにかを作ろうと思っても、落ち着いてなにかをできる場所ではないですよね。いろんなものを気にしてしまって、自分を見失うことがすごく多い。地方から来て東京で成功するのはとても難しいと感じます。なぜなら、全国から「東京でなにかやりたい！」という人が集まって来ている訳ですから。そして、東京というのは世界のベスト3に入る大都市ですからサイクルも速い。そういう街でアートの制作をおこなうのは非常やりにくいな、とは思うのです。自分を落ち着いて見られない、例えばある若者がコツコツやっていて、ちょっと外を歩いてみると、おもしろい展示や企画とかがいたる場所で行なわれていて、そういうのに一喜一憂してしまう、せわしなさがあります。殺人事件も事故も多い、人の噂も七十五日だし、利益優先、そのスピードは凄いものです。村上隆さんは、製作の現場は埼玉にあって、発表の場は東京というスタンスですよね。そのほうがじっくりできるんではないかな、と僕も思います。それが札幌だともっとよい地理的に遠すぎるかな、という気もしますが、結局「何を目的にするか」です。



"Merry in Tokyo" 2003

自分次第です。東京にどっぷり漬かると自分を見失う恐れが凄くあるなとは感じます。大変な場所ですよね。そこで、強い光を求めれば強い影ができるんです。札幌はゆったりとしているし、食事もおいしいし、自分のペースでやれる場所だとは思うのですよ。空気が良くて、自然もいっぱいある。強い光を求めなければ、柔らかい影でやっていける感じがあります。

"Merry in New York" 2003 Free Paper

"Merry in NewYork" 2003

僕はもう30年近くアートディレクションが仕事で、グラフィックデザインから、商業デザイン・美術をずーっとやってきて、高度成長、バブル経済の中で、ただ消耗しきっていった記憶があります。学生時代から、社会に役に立つ仕事がしたくて、グラフィックデザインの仕事を選んだはずなに、社会の役に立つどころが利益優先の世界で消耗していって、気が狂うようなこともありました。それで、僕は90年代は、平和や環境などの社会ポスターばっかり作ってました。震災の神戸を応援するポスターや、写楽のポスター「日本の文化を世界に紹介する活動をおこなったり、自分でいろいろ写真を撮ったりしました。ず〜っと、社会とコミニュケーションすることにこだわっています。

"Merry in Tokyo"2003 Freepaper

「Merry」の活動のきっかけは1999年に自分の撮影した写真を見ていたら、バスの中で撮影した子供たちの笑顔の写真があって、その屈託のない笑顔の中に21世紀はあるんだな、と感じたのです。「笑顔でコミニュケーション」する、というのが重要なんじゃないかな、という僕の直感が「Merry」が生まれた源ですね。その時って周りはまだ世紀末のような暗いアートが多ったんです。でも、僕はそんな「夜のアート」から、「朝のアート」になるように、夜から朝の時代になると思ったのです。笑顔の写真の持つ生命感や息吹を表現しようと思って、その時、出版した写真集を「Merry」にしたんですよね。そして、2000年にラフォーレ原宿のミュージアムの正月企画でその写真集の展覧会をやりました。「ミレニアムスマイル」というテーマで「Merry」というタイトルの展覧会を2週間やりました。「2000年の笑顔」というものを表現したかったのです。「暗いアートより、僕はこれから21世紀では笑顔だ！」と思ったんですよね。暗さより明るさ、そしてコンピューターグラフィックスで作りこんだモノではなくて、素朴な「素」のものを表現したい、というところで「笑顔」のコミニュケーションアートになったのです。

僕がなぜこういった活動に興味があるかといえば、学生時代に70年代安保があって、世代的に「戦争」というものが家庭にもありましたから、平和というものにも関心があったんですよね。それに、当時は社会や政治を良くも悪くもファッションで考える時代でしたから、女の子と喫茶店で話すときも、まず政治の話をしないとダメという感じがあったんですよ。音楽によって世界を変えようとみんなで思ったり、世界中の若者が真剣だったような感じがしました。僕はアートというのは、ごはん食べることもアートだし、生きていることもアートだと思っていますが、「社会とアート」と聞かれれば、あの頃の若者の活動はアートだったのかな、という気はします。これからのアートとは、21世紀の社会にどう関わるか、企業や社会のシステムをいかに入れ込んでいくのかというのが重要だと思います。60年代は画商がいて、私小説的なアートを作家が作って、お金持ちのパトロンが買うというのがアートの世界だったと思うんですよね。ニューヨークのアートもそうやって活発になった事実もあると思います。

でも、今は「アートは社会といかに関わるか」が重要だと思います。ギャラリーやミュージアムで愛好家だけ来て観る閉鎖的なものではなくて、一般の人とどう関わっていくか、社会に関わっていくか、企業などの社会のシステムにどう入れ込んでいくのか、というのが課題だと思っています。だから、アートを行なう場所は、よりパブリックな場所であるべきですよね。「Merry in Sapporo」でも四番街商店街の壁面をすべて使って笑顔の写真を展示して、フリーペーパーとゴミ袋5万枚配布して、みんなにゴミ拾いを呼びかける。それらの活動は北海道全部がアートのためのキャンバスであるということで、そこに社会のシステムを入れ込む…札幌では四番街のお店ということになります。そして、人と人、人と街をコミニュケーションさせるということが僕の狙いだし、それが新しいアートだと思うんですよ。5月30日に札幌でゴミ拾いをするのですけど、渋谷でも「ゴミ拾い」は午後2時や3時と一番人通りの多いときに行いました。考え方によってはゴミ拾いを、人通りのない夜にやって、ゴミを集めて、参加した人だけで満足という方法もあると思いますが、それではアートにならない。単なるゴミ拾い活動になってしまう。僕の狙いは、ゴミ拾いをただ行うことではなくて、「ゴミ拾いをしている姿をできるだけ、多くの人に見てもらう」。そして、「ゴミを捨てない街の空気を作る」のが大切で、そのことによって新たなコミニュケーションが生まれたり、いろいろなメディアが動くことによって、街がもっと住みやすい場所になり活性化させる、それが狙いなんです。「Merry な街づくり」です。

アートでなにか活動をしようとすると、大切なのは、「社会とコミニュケーションすること」だと思います。例えば、子供からおばあちゃんまで一般の人が参加できて楽しめるもの、それが本当のアートなのではないかと僕は思います。閉鎖的なものは良くないですね。内容をあまり考えずに「自分のやっている活動はアートです！」というのを前に出しているのは一番カッコ悪いと思います。僕は自分の活動を詳しく聞かれれば「コミニュケーションアートを目指しています」とは説明しますが、アートという言葉を前面に出してはいません。一番重要なのは内容であり、ストーリーです。そして、「社会との関わり」です。

"Merry in KOBE" 2002

"Merry in Tokyo" 2003

僕は「Merry」をもっともっと世界に広げていきたいと考えています。札幌も不景気や十勝沖地震など暗いニュースもありますよね。それを「Merry」によって、札幌の街がMerryな街になるように、みんながメリーな人になるように、北海道全部がMerryになって素敵な未来になればいいと思います。そこにMerryをやる意味があるのです。5月30日のゴミ拾いにはたくさんの人の参加を期待しています。その光景によって、ゴミをポイ捨てしない街の空気を作ること、すなわちMerryな街を作る、街がエンターテイメントな輝きを取り戻すということです「MERRY IN SAPPORO」が終わった後も、幸福な「Merryな空気」が恒久的に続いていったら、それは広大なアートで、同時に凄いパワーになると思うのです。アートが街を変える、国を変える、地球を変えるかもしれませんね。僕は「Merry」な地球になればいいなぁ、と思います。

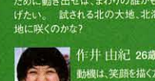
COMMNET: Merry in Sapporo Staff

賀集 いりえ 23歳 / フリーター（自由業？）

いつもニコニコしていたカシュウに、先輩がMerryのことを教えてくれたのが12月。「笑顔は人を幸せにできる」と、これまで生きてきた中で感じていました。笑顔で友達がありではなく、街まで元気にするなんて！　素敵！　と思い、2月の記者会見の時からプロジェクトスタッフとして、プレスリリースの作成、取材対応、ゴミ拾いの準備などを担当しています。常に笑顔でいることを心がけておりますが、毎日Merryなことばかりではありません。より多くの人たちにMerryになってもらうために、手を動かし、足を運び、時には知恵を絞って活動しています。この血と汗と涙のにじむような努力が実を結び、Merry in Sapporoが成功した日には、Merryな笑顔になれるはず。終わった瞬間に誰よりもにっこりできるように がんばってますので、みなさま5月30日のゴミ拾いには是非是非ご参加ください！

中川 このみ 20歳 /大学生

私がMerryに出会ったのは本当に偶然だった。私はMerryが何なのかとか、何をしているのかなんてぜんぜん知らなかった。今まで自分が生きてきてできた、人とのつながりがMerryProjectを教えてくれた。まず私がMerryと出会えたことが、これから始まる私のMerryのはじめの一歩。ただ純粋に、笑顔を街中に溢れさす、というものに惹かれた。自分の行動が誰かの笑顔を導けるというのなら、誰かがそれでしあわせな気持ちになれるなら、それほどすてきなことはない思った。私たちは、小さなきっかけを創っていくに過ぎない、それでも小さなことがたくさん集まれば、きっと大きなものになる。それがProjectを教えてくれた、この大次第。一人が何かのために動き出せば、まわりの誰かもきっと動き出す。そういう連鎖を広げたい。　試される北の大地、北海道。さあ、次はどんなMerryがこの地に咲くのかな？

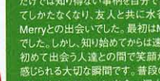


作井 由紀 26歳 /デザインプロダクション勤務

動機は、笑顔を描く友人が見せてくれた新聞記事でした。笑顔つながりという事で記事を読んで見ると偶然にも、その2日後に水谷さんが来れるのを知り、新聞記事だけでは知り得ない事柄を自分で見てみたくなり、その時から会いたくてしかたなくなり、友人と共に水谷さんに会いに行きました。それがMerryとの出会いでした。最初はMerryの事はサラリとしか知りませんでした。しかし、知り始めてからは速い速度で吸い込まれていきました。初めて出会う人達との間で笑顔が生まれる瞬間はとても心地よいと感じられる大切な瞬間です。善段の生活で、作り笑いをしてしまう場面があります…Merryに出会い沢山の自然な笑顔に出会いました。心からの自然な笑顔で笑えていられる事は幸せなんだと気付きました。これからも沢山の笑顔と出会える場面と笑顔でいられる時間を大切にしたいです。

新関 理絵 20歳 / フリーター

学校では毎日みんなで笑ってました。笑うと楽しくて、悩みとかも忘れてしまいます。自分が笑っていると友達も笑うし、家に帰って家族と一緒にいる時に笑うと、家族も笑顔になって、どんどんみんなが笑顔になると思います。それで、卒業制作のテーマを「Keep smile」にしました。笑顔を忘れないよう過ごしてもらうことを目的として、ポスター、ポストカードを制作しました。そんな時、新聞の記事を見て「Merry Project」を知り笑顔がテーマだということに興味を持ち、どのような考え想いで動いているのか知りたかったので、水谷さんにメールを送り参加することになりました。3月から参加し今日までの中で、多くの笑顔を見ることができました。Merryのゴミ拾いは笑顔があふれています。見ず知らずの人が一つのゴミをきっかけに笑うことができると思ってもいませんでした。笑顔の人の集まってくると思うので、5月30日のゴミ拾いが笑顔で始まり笑顔で終わるよう成功させたいと思います。



"Merry in Sapporo"2004 Freepaper

MERRY IN SAPPORO

1(THU)APR→30(SUN)MAY

PEOPLE'S PURE SMILES MAKE A NEW ERA FILLED WITH HOPE AND HAPPINESS.
MAKING THE WORLD "MERRY" THROUGH COMMUNICATION ART, "MERRY PROJECT"

MERRY IN SAPPORO

4/1(THU)-5/30(SUN)

＊札幌市四番街の街路幕に
　「笑顔の展覧会」5月1日より展示中。
＊フリーペーパーを四番街各店（一部を除く）にて配布中。
＊5月30日(日)には四番街ゴミ拾いプロジェクトを開催。
　一般参加者を募集中。

詳細は以下のサイトでご確認ください。
Merry Project：http://www.21merry.net